



アフリカの東南部に位置する、世界最貧国の一つ、マラウイ。かつて赴任したここに私の第二のふるさとがある。国際協力機構（JICA）海外協力隊員として配属されたカタベイで自宅から勤務先の聴覚支援学校まで10キロの道を通った。魚の干物の匂いが漂う



マラウイ

角田直也さん(38)

総社市在住

大きな湖沿いを自転車で走り、青々とした山々と天高い空を日本の風景と重ね合わせていた。
わが家は、現地の人と同じ集落の中にあり、電気や水は通じていたものの停電や断水は日常茶飯事だった。電気がなければ炭火でご飯を作り、水がなければ井戸水を浴びる生活。近く

探究心培う豊かな時間

の市場ではトマトと玉ネギ、ジャガイモが手に入った。内陸国だが湖が近くにあったため、魚を食べること

とができ、他の隊員たちからうらやましがられた。日本と比べれば不便な暮らしかもしれないが「住めば



隣人と食事を楽しむ筆者（右から2人目）

ったことがある。ところが、だしを取るため庭先で一晩火にかけていた鍋がなくなったり、かまぼこがボロボロと形崩れしたりするなど失敗の連続だった。だが失敗と改善を繰り返す中で、

現地の人と交代で火の番をし、かまぼこ作りを何度も重ねて、それなりのラーメンが完成した。「ラーメンを食べるためにはどうするか」という探究心は、結果的に現地の人と楽しむ日本の懐かしい味につながった。

都」。むしろ日本の生活では得難い「探究心」を培うことができたように思う。マラウイには、最低限の素材と膨大な時間がある。ある時、「ラーメンを食べたい」との衝動が起き、鶏の骨からだしを取り、小麦粉で麺を、ナマズの白身でかまぼこを作ったことがある。ところが、だしを取るため庭先で一晩火にかけていた鍋がなくなったり、かまぼこがボロボロと形崩れしたりするなど失敗の連続だった。だが失敗と改善を繰り返す中で、

現地の人と交代で火の番をし、かまぼこ作りを何度も重ねて、それなりのラーメンが完成した。「ラーメンを食べるためにはどうするか」という探究心は、結果的に現地の人と楽しむ日本の懐かしい味につながった。

翻って物にあふれている日本では何でも買うことができる。さらに忙しい日々の暮らしで答えを急ぐ傾向があり、探究の時間を得ないまま、インターネット検索などで簡単に答えを知ることができる。学びの原動力である「知りたい」「やってみよう」がかなえにくい環境になってしまっているのではないだろうか。日本の子どもたちにはぜひ「やりたい」を原動力にたくさん失敗し、たくさん学んでほしいと願っている。